

## 地域における学習活動等の実施事業

### 団体名

国立大学法人岩手大学

### 震災後の地域の状況・仮設住宅数

気仙地域(特に陸前高田市)は、市街地が壊滅的な被害を受け、未だ高台整備や災害公営住宅の整備が進んでいないため、まだまだ仮設住宅での生活を強いられている住民が大勢いる。

### <取組名>気仙地域のコミュニティ再生支援事業プロジェクト

#### 取組概要

実施形態 (該当に○)	自治体単独実施	団体等との連携実施	大学との連携実施	(連携している団体等・大学の名称)
			○	岩手大学
実施主体・ 場所等	コーディネーター数	ボランティア延べ人数	年間実施日数(回数)	活動場所
	1	25	30日	市内の各商店街・仮設店舗・宿泊施設など

#### 活動内容

※該当する内容に○

学校支援	学習支援	部活動指導	美化・環境整備	登下校指導	学校行事・その他
					( )
学校と地域の 協働学習	復興学習	防災教育	伝統文化・芸能	職業体験・キャリア教育	イベント・行事・その他
					( )
放課後等支援	学習支援	体験・交流活動	遊び・スポーツ	児童クラブとの連携	その他
					( )
家庭教育・ 保護者支援	家庭教育講座	親子参加行事	サロン・相談対応	家庭訪問相談	その他
					( )
地域課題に応じた 学習・交流	高齢者支援・世代間交流	心のケア・健康管理	生活再建・地域づくり	地域人材育成	その他
			○		( )

#### <取組の内容を具体的に記載>

気仙地域のコミュニティ再生支援事業プロジェクトでは、気仙地域、とくに陸前高田でコミュニティの中心となって活動している各種団体との交流・連携を図り、被災地で復興に取り組む市民間のネットワークの構築を目指すとともに、市外で関心を持っている人々と高田市民をつなぎ、陸前高田市をめぐる拡大コミュニティ形成の一助をなすことをめざす。

より具体的には、陸前高田地域の活性化に取り組んでいる地域住民・団体等との連携によりローカルメディアを刊行する。ローカルメディアを刊行する過程で地域住民・団体の交流・連携と学びの機会を創出する。また、高田市外の人々へのローカルメディアの配布とインターネット上のソーシャルメディアをもちいた関係性の継続によって、市外の人々の関心の維持と高田市民との関係形成の機会を創出する。



岩大 E\_code



『たかたび+』



下北沢物産展・気仙フェアの様子

取組の変遷

準備段階

◇被災による課題

被災地では人口減少が加速している。生活環境のなりわいの再建について先行きが見通せない状況が続く中、他地域への移住や避難先での住宅再建などの選択を行う人々も増えている。この傾向は確実にまちの経済や地域コミュニティの在り方・持続性に大きな影響を与える。特に子育て世代、若年層の人口流出はまち全体の持続可能性という観点からも大きな問題である。さらに被災地では、幾多の課題に取り組むために平常時に比して圧倒的な人的資源が必要とされている。その一部はこれまでボランティアや全国の自治体等からの派遣によって供給されてきたが、そうした支援を街のハードウェアの復旧後も長期にわたって求め続けるのは極めて難しい。

◇住民等からの要望・必要な取組

気仙地区、特に陸前高田は、震災の被害も大きく、全国的に集めた注目も大きかった。多くの人々が物資支援や経済支援などの形で支援活動に関わった。また学生やNPO関係者、全国自治体からの派遣職員などを中心に、ボランティアや支援活動との関連でこの地に足を運び一定の時間を過ごした人々も数多い。そうした人々の関心をより長期にわたる関心と愛着につないでいくこと、さらには高田をとりまく「拡大コミュニティ」の形成と維持をはかることは上記課題を克服していくために大きな意義を持つ。

体制づくり・取組の実施

◇協力を呼びかけた団体・関係者、役割分担

岩手大の学生、および教員有志から構成される岩大 E\_code というチームを作って活動を行っている。平成 26 年度現在は人文社会科学部・教育学部の学生を中心に 11 名のメンバーが存在している。活動の統括は教員である五味が行っている。E\_code では、定期的に陸前高田に通いながら地元の人々との交流・協働作業を行い、仮設商店街や仮設店舗経営者をはじめ、数多くの陸前高田市民と関係性を築いてきた。その関係性のもとに地元の人々と協力して紙メディア(ローカルメディア)を発行し、またインターネットを用いて市内外の人々にむけた情報発信を行っている。こうした取組を通じて、市内の人々同士、また市内と市外の結節点の一つとなり、高田市をめぐる拡大コミュニティ充実の一助となることを目指している。

◇取組の充実や課題解決のための工夫

今年度は、交流・連携活動の対象や種類をひろげ、祭りを継承する地元団体との交流や市内外の学生などとの交流にも積極的に取り組んだ。また新聞報道や口コミなどにより陸前高田に関する情報を徹底的に収集し、それをベースとした活動を行った。こうした基盤の上に、平成 26 年度はこの一年の間にできた店舗、宿泊施設などを紹介する小冊子『たかたび+』を作成した。これを市内、市外、県外などで配布する。平成 27 年2月には東京の下北沢で開催された物産展に参画し、上記情報誌を手渡ししながら東京周辺の人々と直接交流し、つながりを強化した。

成果・課題や今後の展望

◇これまでの取組による成果

陸前高田市内外での活動の対象範囲は、着実にひろがっているとともに、交流・連携の密度も深まっている。高田市内においては、活動が多くの人に認知されており、学生メンバーも顔と名前を覚えてもらい高田市内での存在感を増している。この活動が市民同士のネットワーク構築の機会ともなっている。また交流機会のあった市外の人々とソーシャルメディアを通して関係性を維持する中で、全国各地の人々との関係性も蓄積しつつである。さらに我々とのつながりが陸前高田への訪問、再訪などにもつながるケースも徐々に増えている。

◇復興に資する内容としての数値的達成の状況

これまでの活動の蓄積により陸前高田市内外での直接的な交流の対象範囲は数百名規模になっている。本年度作成した情報誌の印刷部数は 1 万部であり、これらは陸前高田市内、そして全国各地で配布される。下北沢でのイベントはインターネットを通して交流を行ってきた人々へ情報誌を手渡ししながら交流を行える機会ともなった。

◇課題や今後の展望

とくに市外の人々との、より戦略的で計画的な交流とその質の向上を図っていく必要がある。また高田市外で高田に関心を寄せる人々同士の結びつき、さらにそれらの人々と高田市民との関係性をさらに強めていくことで、長期的に継続しうるコミュニティへと深化させるべきだと考えている。